「無宗教」から考える日本人の持つ宗教意識について

福島大生

なぜ日本人の多くは、初詣や葬式を行ったり、お守りを買ったりと、一見すると宗教を信仰しているが故と思われる行為を日頃から行う一方で、自身の信仰する宗教を尋ねられた際には自身は無宗教であるとするのか。本論文ではこの問いを明らかにすることを目的とし、加えて宗教や菩提寺への印象や関わり、葬式の変化などを調査したデータから、このような日本人が持つ宗教への意識を考察した。

先行研究から、日本人は特定の人物や教義が存在する「創唱宗教」を宗教だと認識しており、それらが明確ではない自然発生的な「自然宗教」に対しては宗教ではないという意識を持っていること、そしてこのような意識が生まれた要因として、明治時代の「国家神道は宗教ではない」といった「神社非宗教論」が影響しているということが考えられた。当時の維新政府は国家神道を国教化し、天皇絶対視を目指していたが、欧米列強から日本国内でキリスト教を自由に布教できる体制を整えるよう要求されたことで、国家神道は宗教ではないとし「信教の自由」を掲げた。そして神を信じることは宗教ではないという意識を根付かせたことがこのような意識ができる基盤になったと考えた。

近年、日本では家族葬の増加や仏壇・神棚を持つ家庭の減少が見られた。都市部への人口流入などにより、宗教的行為への関心が薄れつつあることが一つの要因として考えられる。一般葬と家族葬の平均の葬儀費用は総額で約 55 万円もの差があることで、一般葬が避けられ家族葬が好まれるようになったり、仏壇・神棚は都市部の賃貸住宅などの住協構造の関係で置かれることが減少したりしている。特に若年層は菩提寺や供養へのこだわりが希薄で、都市部移住で伝統的な宗教文化との接触が減少している。初詣や葬式などは宗教というより伝統文化とみなされ、費用や時間、手間が増すと宗教的行為へのこだわりがさらに薄れる傾向がある。日本人の宗教意識は軽い信仰心にとどまり、仏教や神道は信頼されているが、新宗教には不信感を抱く人が多く、今後地方の寺や墓は廃れる可能性があると考えられる。